

新妻昭彦

副題の続きに「没後100年記念」とある。ギッシング研究を国際的に推進してきた3名の研究者に加え、10名の研究者による「総合的な研究書」(375)である。同時に評伝などを除けば、どうやら事実上本邦初の総合的研究書であるらしい。初めてというのは驚きだが、ある意味では、広く知られ愛読もされながら、良かれ悪しかれそれにとどまってしまっているGeorge Gissingという作家の現在の位置をよく表しているのかもしれない。ギッシングへの熱意と愛情、意欲と気概にあふれ、時間と労を厭わず丹念に編まれた好著であり、日本のギッシング研究史上、文字通り画期的な成果である。

この書の評するには、なによりその企画・編集方針について考えなくてはならない。まず一見して思うのは、先に同じ松岡光治氏の編集により同じく英宝社より刊行された『ギヤスケルの文学』(2001)との類似である。ともに「巻頭言」と「文献一覧」に始まり「生涯」と「100年間の研究・批評」が続き、さらに代表的長編作品にそれぞれ1つの章が割り当てられ、そこに詳細な「関連情報」の1章が付けられている。各作品についての章にはまず「梗概」が置かれ、そのあとに「論考」が続くのであるが、その論考の執筆者名は、本文よりもポイントを落とした「註」のあとにその「註」と同じ小さなポイントで、しかも括弧に入れられ、さらに目立たぬように右寄せで示されている。となれば、研究社刊『20世紀英米文学案内』やその後継にあたる『小事典』シリーズのような、かつては多く存在した作家別入門書シリーズの第2弾かと期待することになるのだが、残念なことにそうではないようだ。第3弾の刊行は約束されていない。そして誤解なきよう急いで付け加えなくてはならないのは、本書も決して通常言われる意味での「入門書」ではないということである。

巻頭に英語文献一覧、巻末にはクスティヤス編『ジョージ・ギッシング書簡集』第9巻の年譜に拠る詳細な「年譜」を配し、第15章「ギッシング関連情報」には、学術誌*The Gissing Journal*、1999年と2003年に開催された2度の国際会議、Wakefieldにあるギッシング・トラストとギッシング・センターについてのこれも微に入り細にわたった紹介、ギッシング関連のメイリング・リストとウェブ・サイトから古書購入のためのサーチ・エンジン、さらには電子テキストをコンコーダンスとして利用するためのソフトウェアの

紹介とその実践例まで示され、最後に日本語による研究書と翻訳の網羅的一覧が収められている。索引も詳細かつ精確である。時間と労力を十分に傾注し、A5判xxvi+404頁のスペースに遺漏なく盛りこめられるだけの情報を盛り込む、これは編者松岡氏の研究姿勢と、おそらくはその人となりによるものであろう。氏のホームページにアクセスした経験がある方なら、たちどころに納得するに違いない。いずれにせよ結果として、ギッシング研究を志す者にとっては必携ともいべきデータ・ベースが成立することになった。しかし、これは本書の一面にすぎない。そう、たいへん欲張りな本である。最終的には「(没後100年記念)」と追記することにより、「没後100年記念論集」としての性格まで付与されているのだから。

次に注目すべきは『ギッシング・ジャーナル』を刊行より支えてきた Pierre Coustillas、Jacob Korg、小池滋の3氏を迎え入れたことであろう。第1章「ギッシングの生涯」は1983年に*The Dictionary of Literary Biography* にコールグ氏が寄せた文章の松岡氏による翻訳と詳細な訳注からなり、第12章「その他の長編・中篇小説」は同じコールグ氏の *George Gissing: A Critical Biography*(1963)の該当箇所を光沢隆氏による翻訳である。さらにクスティヤス氏による書き下ろしの「巻頭言」のほかに、2003年の国際会議での講演“Gissing: A Life in Death A Cavalcade of Gissing Criticism in the Last Hundred Years”を得てその翻訳を第2章「没後100年間におけるギッシング批評の進展」にあてている。さらに小池滋氏からは第14章「ギッシングとディケンズ」を得た。各作品を担当する10名の執筆者も、これまでギッシング研究を支えてきたベテランとこれから支えて行くであろう若手を配している。なにやら、これまでのギッシング研究を一旦総括し、これからの研究への拠点を築くといった趣きさえ感じられる。

最後に評すべきは「論文集」としての一面である。質量ともにこれが本書の中核であることは、本来言うまでもないことなのだが、前述したように付加価値をふんだんにつけることによって「総合的な研究書」(375)になり、「没後100年を記念する普通の論文集」(375)となることが回避された結果、論文集としての性格が、その分目立たなくなった感があるのは残念である。副題に「全体像の解明」とあるように、「重箱の隅をつつくような局所的な読みではなく、ギッシングの文学全体に関わる大きな問題について、新たな視点で読者を大いに啓発するような読みを提供すること」(vii)が「編集方針」

として執筆者に課せられていたのかもしれないが、いずれも「普通の論文集」を構成するに余りある論文である。執筆者名は前方に大書されても良かったのではないだろうか。

長編小説の選択は現在翻訳が出ている*The Unclassed* (1884)、*The Nether World* (1889)、*New Grub Street* (1891)、*Born in Exile* (1892)、*The Odd Women* (1893)、*Sleeping Fires* (1895)、*The Whirlpool* (1897) とし、これに旅行記*By the Ionian Sea* (1901)と随筆*The Private Papers of Henry Ryecroft* (1903)を加えた9作品が第3章から第11章までで扱われ、第13章が短編小説にあてられている。本書にはすでにこれも気概にあふれた大野龍浩氏による書評があるので(『英語青年』2004年5月号)、無用な重複は避けたいと思う。各論文に見い出されるヴィクトリア朝文化研究上の可能性を指摘していくことにしよう。

第3章(『無階級の人々』)の倉持晴美「不幸を見据える」と第4章(『ネザー・ワールド』)の倉持三郎「どん底に住む人々」は、ともに貧窮層を描いた初期作品をギッシングの伝記的事実を介して当時の都市問題へと結びつける。第5章(『三文文士』)の松岡光治「貧乏作家はうだつが上らない」と第6章(『流滴の地に生まれて』)の金山亮太「汝再び故郷に帰れず 突然変異か形質遺伝か」では、ギッシングが抱いていた「決定論的教育観・階級観」や「遺伝的階級観」が明らかにされる。第7章(『余計者の女たち』)の武田美保子「狂気の遊歩者 身体記号としてのモニカ」と第9章(『渦』)の太田良子「ギッシングと姦通小説」はともに「新しい女」小説として研究が進んでいる作品だけに、ヒステリー症や優生学的退化であれ、姦通であれ、この領域における研究の豊かさを実感させられる。第8章(『埋火』)の小宮彩加「“*Carpe Diem!*” 『埋火』の選択」と第10章(『イオニア海のほとり』)の並木幸充「ギッシングの「詩と真実」」。ともにギッシングとギリシャ・ローマ古典文学・古代世界との結びつきに基づいた作品であるが、さらにオマール・ハイヤーム・クラブの存在、インターテキストとしての「ルバイヤート」の可能性(第8章)、この時期以降の「イタリア旅行」というトポスの持つ意味が示される。第11章(『ヘンリー・ライクロフトの私記』)の加藤憲明「『ライクロフト』に見る新たな自己」における虚構の中での自己表現・実現は、『三文文士』論や『流滴の地に生まれて』論にあるメタフィクショナルに分身を創造することによる自己形成に相通するものがある。第13章、八幡雅彦「短編小説」は、約115あるとされる短編小説の中から、ロンドンの

社会史を構成する各「生活階層」が描き出された9編を選んで論じたものであるが、ここが豊穡たる研究領域となる可能性を感じさせてくれる。

ギッシングが「社会、階級、文明、都市、大衆、教育、改革、女性、結婚、家庭、商業、金銭、芸術、科学、人生、自己」(vi)といった「多くの問題」に矛盾した感情を抱き、「保守主義、古典主義、理想主義、実証主義、自然主義、平和主義、環境保護主義、現世謳歌主義、芸術至上主義、運命論、不可知論、懐疑論、リベラリズム、ヒューマニズム、フェミニズム、アンチヒロイズム」(vi-ii)といった多様な面を持って小説を書いていたことが確かである以上、ヴィクトリア朝文化研究においてギッシングに関する研究が今後隆盛になるのは間違いないだろう。このとき研究対象として再評価されるギッシングが、「愛すべきマイクロフト=ギッシング」にとどまらないであろうことは、本書の各作品論がすでに実証してみせている。しかし昨今の文学研究の動向からすれば、今後ギッシングのテキストを対象とする研究は、本書各論に通底する作家研究特有の敬意と愛着とは相容れないものになる可能性が高いのではないかと思う。十九世紀末のインターテキストの一部と化したギッシング。しかしそうだったとしても、本書の意義が変わることはないものと思う。本書がギッシング研究にとどまらず、さらに広くヴィクトリア朝文化研究、世紀末研究に対応するだけのポテンシャルを保持していると考えられるからである。

(立教大学教授)